

大岡 信

ヨーロッパ。ハで連詩を巻く





大岡信

岩波書店

ヨーロッパで連詩を巻く

ヨーロッパで連詩を巻く

一九八七年四月一七日 第一刷発行 ©

定価一六〇〇円

著 者 大 岡 信 おおくま のぶ

発行者 緑 川 亨 きよがわ へい

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番地 株式会社 岩 波 書 店 いわたな しょてん

電話 〇三六二四二二
振替東京六三六三〇〇

印刷・法令印刷 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-002372-1

目次

I パリ、ベルリン……………一

II ヴァンゼー湖畔……………七

III ロッテルダム……………一六

あとがき

I パリ、 ベル リン

一九八五年九月半ばの新聞にある人の死亡記事が出ていた。ジュリアン・ベック、アメリカの俳優・演出家である。ロイター共同電のその記事はこう書いていた。

《関係者によると十四日、がんのためニューヨークで死去、六十歳。

妻ジュディス・マリーナさんと前衛劇団「リビング・シアター」を創設。一九五〇年代から「コネクション」「ブリック」「バラダイス・ナウ」など、俳優が観客に交じって演じる作品を次々に生み出した。反政府活動などのため米国、欧州、アジアで計十二回投獄された経歴を持つ》

この記事を目にしたとき、「あ、あのジュリアン・ベックが……癌だったのか。どこか弱々しげだったのはそのためだったのか」と思った。

リビング・シアターのこと、ジュリアン・ベックのことも、私は詳しくは知らない。さかのぼれば五〇年代、アメリカで抽象表現主義絵画、いわゆるアクション・ペインティングが全

盛だった当時、演劇界ではリヴィング・シアターが同時代の舞台芸術における並行的現象として話題になっていたことをおぼえている。そして彼らの運動がおそらく日本におけるアンダーグラウンド演劇の、海外における重要な先行者の一つであつただろうことも想像していた。寺山修司が俳優を観客の間に立ち混じらせたこと、さらには街頭へ歩み出させたことも、リヴィング・シアターという一つの先行形態があつてのことではなかったかと思う。しかし私は実際にはその舞台を見たことはなかった。

ジュリアン・ベックを見たのは、彼の死ぬちょうど三ヵ月前だった。まったく偶然に私は彼が大きな舞台に立って、ポケットから出した手帖をひらき、「まとまった作品ではないんだ、心覚えに書いておいたにすぎないものだが」と言いながら、数分間、アジテーションに近い読み方で詩を読むのを聞いたのだった。その十分ほど後、今度は私が自作の詩を彼と同じ場所に立って読んでいた。場所はパリのボンピドゥー・センター地階大ホール、時は一九八五年六月十四日夜九時過ぎ。

私はその前日パリに着いたばかりだった。第九回国際詩・音楽フェスティヴァル「ポリフォニックス」というのに参加するよう求められたのである。このフェスティヴァルを皮切りに、西ベルリンで開催されるベルリナー・フェストシュピール主催第三回世界文化フェスティヴァ

ル「ホリツォンテ85」、ロッテルダムで開催されるロッテルダム文化協会主催「ポエトリ・インターナショナル一九八五」(一九七〇年以来で、第十六回)に参加し、ロッテルダムからふたたびパリに戻って、フランス中部の小さな町アルケスナンとパリとで一週間開催される第二回仏文化サミット(フランス文化省、朝日新聞共催)に加わり、そのあとパリ仏日協会から依頼された自作詩朗読および講演をパリの「詩の家」メゾン・ド・ラ・ポエジーで行うというのが、六月半ばから七月上旬にかけての、思えば超過密のスケジュールだった。

しかも、ヨーロッパから帰るとすぐ、かねて依頼されていた日本の詩についての講演のため、折返し韓国へ出かけねばならないことになっていた。一ヵ月余りのうちに六つの異なる場所でフェスティヴァルやシンポジウムや講演や詩朗読をするというのは、日本にいてさえ経験しない多忙な日程だが、それは逆にいえば、たまに出かける外国であるためにそんな具合になってしまったのもあった。おのおののフェスティヴァルやシンポジウムが、まるで申し合わせたように、一つが終った日に次のが始まるという形になっていたため、「よし、ついでじゃないか、行ってみてやれ」という好奇心に負けた。

『何でも見てやろう』の著者には及びもつかないが、どうも昭和一ケタ生まれの人間が多く共有するこの種の奇を好む精神状態は、私の場合にも歴然とあって、それが結果としてはしば

しば、じつに余裕のない日常生活の悪戦苦闘へわれとわが身を引きずりこむ。西ベルリンでは、目下西ベルリン市の招待作家として滞在中の当の小田実もフェスティヴァルに招かれて参加したから、私はまったく久しぶりに小田氏と会い、観光船のテールをはさんで閑談戯談に時を忘れる楽しみを得た。私たちはその時、フェスティヴァル参加の中国・韓国・インドネシア・日本の物書き一行を歓迎する目的で最初の日の夕方に開かれた晩餐会に向かっていたのだ。パーティーは西ベルリンの西南端にあるヴァンゼー湖のほとりの、リテラリッシュエス・コロキウムという一種の迎賓館で開かれたが、そこに行くため、私たちは河のぼりの観光船にいつせいに乗りこみ、二時間余りの寛いだ水上旅行を楽しんだのである。

しかしベルリンのことはベルリンのこと、今はまだパリのポンピドゥー・センターである。

2

ジュリアン・ベックとその妻ジュデイス・マリーナ、二人とも当夜それぞれの英語の詩を読んだ。ジュデイス・マリーナの詩は幼年時代の追憶にある街の風景をめぐる静かな詩で、私は

感銘深く聴いたが、実はこの夫妻は参加予定者の中には入っていない人々だった。たまたまパリに立ち寄って、ボンピドゥー・センターの「ポリフォニックス」の催しに顔を出したのだという主催者側の説明だった。ジュリアン・ベックはすでにかつてここで自作の詩を朗読したこともあったから、いわば旧知の友のとび入り友情出演という形だった。私はベックの詩（というよりは断片）よりもマリーナの詩の方に深く心を動かされたが、今では動かされたという快い記憶があるだけで、当夜聴いた詩句は忘れてしまった。

その夜自作朗読を予定されていたのは、私を含めて個人で六人、それにカナダから来た四人のパフォーマーから成る四人の馬人ザ・フォー・ホースメンというグループだったが、いわゆるオーソドックスな読み方で詩の朗読をしたのは、北アフリカからやって来たエドゥアル・グリッサンと私ぐらいなもので、他はスライド兼用の、一見くそまじめで実は言語解体の痙攣的な笑いをともなうティム・ウルリッヒのパフォーマンスもあれば、舞台狭しと歌い踊り喋る演技に堂々たるプロ根性を発揮したジャマイカの女性詩人ビンタ・ブリーズのようなパフォーマンスもあり、また身の丈に余る長さの竹筒に砂粒を入れた、元来がブラジルあたりの楽器と思われるものを右手にもって、二十分間ほど、休みなしに大きく振りまわしつづけ、呪文のように詩句を唱えつづけるというお疲れさまの大演技をやったのけたメキシコ詩人（フランス人との混血で、フランスに

住んでいるのだとその時誰かが言っていたが）セルジュ・ペイのようなパフォーマンスもあつて、なるほど「ポリフォニックス」という名が予想させる多様な音、多様な声の祭典だと納得させられた。詩の朗読におけるパフォーマンスはやはり、日本よりは何ととってもヨーロッパやアメリカの方が、多様な趣向を見せているらしいということを思わせられた。

けれども、それはバリのポンピドゥー・センターでの出来事。しかもこの催しの主体たる「ポリフォニックス」それ自体がそのような動向の中心的な推進者なのだから、私はいわばパフォーマンスとしての詩朗読——「朗読」という言葉はここでは極めて坐りが悪いのだが、便宜上使っておく——の、密度の濃い展示を目撃する幸運にめぐまれたといった方がよかつただろう。

事実、西ベルリンのフェスティヴァルでもロッテルダムの詩祭でも、私はたくさん詩人たちの自作朗読の場に加わったが、こちらではいわゆるオーソドックスな朗読法で朗読が行われており、聴衆も注意ぶかく耳を澄まして「言葉を聴く」態度をとっていた。

パフォーマンスとしての詩朗読では、「聴衆」は同時にかなりの度合において「観衆」でもあらざるを得ず、言葉を「聴く」と同時に詩人の肉体全体を言葉として「見る」経験が加わる。これは言語経験としては根本的なものである。実際、私たちは日常の生活においてはそのよう

な、身体表現そのものとしての言語を「見る」経験をくりかえしているのである。パフォーマンスとしての詩朗読は、そのような日常の言語経験を高度に圧縮してみせたものと言うこともできるわけだから、見ていて面白くないわけではない。

たしかにそれは見ていて面白い。しかし、逆説的なことだが、演者が熱中すればするほど、聴・観衆としての私はますます冷静にかえり、このミモノをケンブツしてしまうことになる場合もまた少なくなかった。言葉というものが、音声や身振りだけでなく、意味をもっているということが、いやおうなしにそのような分裂をひきおこしてしまうところに、たとえば音楽の演奏と詩の朗読パフォーマンスとのあいだの、微妙でしかも決定的な相違点があった。

言語はたしかに「演奏」できるものであるが、「演奏」ですべてが終るものではないということをつよく印象づけるものとして、パフォーマンスに重点をおいた詩の朗読があるということ、それが私にはめざましいミモノなのだった。少なくとも、見ていていかにも苦しげに見えるもの、痙攣的、苦悩的な力わざを感じさせるものについて、そういう印象が濃厚だった。このことは「ポリフォニックス」の試みから私が感じとることのできた貴重な一つの忠告のようにも思われた。

「ポリフォニックス」は一九七九年に創設された国際的な芸術運動体である。中心になって

活躍しているのはジャン・ジャック・ルベルで、活動の根拠地はパリにあるが、アメリカ、カナダ、イタリア、ドイツその他で、さまざまな文化機関との協力関係のもとに詩と音楽を中心とする活動を展開してきた。一九八五年の第九回フェスティヴァルまでに、約四百人の詩人・音楽家・美術家が、世界の二十二ヵ所で、二十種類以上の異なる言語により、多様な表現技術を駆使してフェスティヴァルに参加したと、ルベル執筆のパンフレットは言っている。

「招待された人々の国籍は三十を超えるが、それはたいしたことではない。重要なことは、われわれが詩というものの究極到達すべき目標としての多言語的すなわち集合的な、複数許容的な、国際的かつ諸文化横断的な空間を創り出すことによって、《国家問題》——つまり国家主義的錯誤——をのりこえることにある。……ポリフォニックスは『協会』である以上にひとつの精神状態である」

ルベルはこんな風に言い、「ポリフォニックスは明らかに、国境や国家を越える今日唯一の、生き生きとした創造の出会いの場だと思う」云々という、思想家ジル・ドゥルーズ（彼自身もポリフォニックスに出演している）の言葉を引用している。

二十世紀になってからの数十年間、思えばヨーロッパの詩人たちは、世代から世代へ、この「国境を越えた」精神の創造的出会いを求めて、なんと多くの夢を語り、試みをくりかえして

きたことだろうか。ダダイスムは最初期におけるその最も鮮明な烽火だっただろうし、ルベ
ルが「精神状態^{エタ・デスプリ}」という言葉を用いていることも、ダダイスムが何よりもまず精神状態そのも
のへの注視から激発し、ダダとは精神状態そのものであると主張したことに密接に関係がある
と思われる。

このような主張が、ひとつの「協会」という具体的な形をとり、三十を越える国々からの参
加者を集めて、毎年フェスティヴァルを実現してきたことは、なんといってもすばらしいこと
に違いない。しかし、財政的基盤はおそらくきわめて脆いものだろう。ポンピドゥー・センタ
ーのような国の文化機関との協力によって、この国際的な出会いの場がようやく成立している
というのは、冷徹な目で見れば明白な矛盾であろう。しかし、現代世界は、このような協力関
係の形をとらない限り、とうてい多言語、多国籍の人々によびかけたり集めたりすることのお
ぼつかないほどに広がってしまったのであって、文化事業が国家主導型のフランスの場合、ポ
ンピドゥー・センターのような機関がはたす役割の大きさは測り知れないわけである（そうは
いっても、ポリフォニックスが出演者のために旅費や滞在費まで支払うなんてことは、夢のま
た夢である）。

いずれにせよ、私は今までかけちがって会うことのなかったジャン・ジャック・ルベルと、

出演当日ボンビドゥー・センターで会い、その開放的な人柄に嬉しい印象を受けた。そしてもう一人、これはすでに東京で一度懇談したことのあるボンビドゥー・センターの「話す雑誌」^{ルヴ・バルレ}部門の部長ブレーズ・ゴージェイエにもその場で再会して、この「話す雑誌」部門がまさに「ポリフォニックス」と協働している当の部局であることに気づく。ゴージェイエの知り合いには、私の旧知の詩人や学者や舞台関係者が何人かいて、初対面の時からたちまち親しくなっていたのである。彼は、かつて日本にやってきて私も講演を聞いたことのあるJ・P・サルトルに風貌がよく似ていて、多少どころか、かなり陽気な酔い方をする自由闊達なお役人である。私の番がきて壇上にあがった時、彼は司会のルベルのマイクを奪いとって、私について即席の紹介をやったが、十分に酒がまわった演説は、広間をうめた聴衆の笑いを湧きたたせ、お役人気質にもあるお国ぶりの独自性を大いに発揮した。

私が当初読むために選んだ詩は六篇で、うち三篇はかつて詩人ジャン・ピエール・ファイーが英訳をもとに訳してくれたことのある詩だった。そのファイーが、仏訳の方の朗読をしてくれることになっていて、私はしばらくぶりに電話で聞く彼の落ち着いたよく徹る低い声に、すっかり安心して会場に出かけたのだった。

思った通り、ファイーの朗読はすばらしいものだった。当夜の多くの作品が、肉声だけでな

く、他の手段をも併用するものだっただけに、ただ詩を読むだけという単純な方法がかえって新鮮に思われるような感じがあって、これもまた「ポリフォニックス」のポリ（多種）の趣旨には適っていただろうと思われた。聴衆の気配というものは、壇上にいると手にとるようにわかるものだが、静かに読まれる詩は、それにふさわしい静かさを一瞬にして生む。

「ポリフォニックス」が済んだ翌日、私はベルリンに向けて飛ぶことになっていた。そこでは、私は別途日本から直行する川崎洋と共に、とくに私たち二人のために用意されたある企画に参加することになっていた。すなわち、ドイツの二人の詩人といっしょに、日本の連歌・連句の伝統にヒントを得た、日独両語による「連詩」を共同で作るといふ、ある意味では無茶な企てである。

川崎洋も私も、同人詩誌「權」ですでに十年以上前から同人全員による連詩の試みをたびたびやってきた仲間だが、それが私たちの知らない間に、ヨーロッパで知られていたことが、私たちを招いてのこの破天荒な試みにまで発展したのだった。